

内郷村報

法人則
從順ナ
ルベシ

内郷村報の 六大使命

- 一、政黨派を超越して、村を實主義を標榜す。
- 二、村内外公私各機關の活動状況を報導し併せて其協調を計り、總觀和協努力の實現を期す。
- 三、本村社會事業の徹底を期す。
- 四、村内の善事美行を表彰し、且之を獎勵す。
- 五、本村出身者及本村關係者との聯絡を計り、且其發展向上を期す。
- 六、餘力を以て、國民善導に當る。

に先立ち有効なる射撃を開始し、友軍の眼目に容與する所甚大、特に旅團長の絶讃を享く。

宿營命令と同時に、巡察の任務をうけ午後九時より約二時間舎營區(下館町の一部)横塚横島

祓へたまへ！
清めたまへ！

大内民恵

こゝに事新しく説く迄もなく、祓へたまへ、清めたまへは、神官が齋祀祭典の行事中、幾度もとなへられ、祝詞中の言葉である。恐らく日本國民にして、之を知らぬ者はあるまいと思ふ。されど其由来を知り、其意味を吟味する者は少ないと思ふ。記者の如きも正に其一人であつて、少年の頃、祭典に招聘した神官の歸られた後に、塵拂を振りまはしつゝ、祓へたまへ、清めたまへと、ふざけまはつて、母から叱られた事などもあり、此年になつても、至つて無關心で居つたのである。然るに最近、本居宣長先生が書かれた、古事記傳の直毘靈の一章を讀むに及んで、日本國民の一人として、全く相濟まなかつた事を知つたのである。

之を要するに、祓へたまへ、清めたまへは、伊邪那岐命が阿波岐原で、祓をなされた時の御言葉にして祓ふことは、塵や埃をはらふ事であり、清めたまへは、汚れや濁りをきよめる事であり、祓は水をきよめて、水を以て洗ひるゝ意味であるのである。かくて心身を清淨潔白にして、直聖の道即ち、真正純美の言行に精進するといふ事であつて、之が所謂、我日本の宗教並に哲學の起原をなすものと思はれるのである。世に學者といはるゝ中には日本には宗教もなければ哲學もないなどといふものが少くないが、それは大に間違つた議論であると思はるゝのである。

佛敎の念佛座禪、耶蘇敎

の反省悔改は、祓へたまへ清めたまへと、同工異曲其軌を一にし、哲學は直毘靈の道の探究檢討であるといふべきである。

今や昭和九年も將に暮れなんとする。顧みれば過去一ケ年間に於て、我一身も我環境も、塵埃汚濁に犯された處多大であつた。

いざや此際、我敬愛する讀者諸君と共に、我等の宗教、我等の哲學の、基礎根元をなす、祓へたまへ、清めたまへの聖辭を高唱して

其一切を洒掃洗濯し、清純無垢の心身を以て、來るべき昭和十年を迎へ、共に手を携へて、直毘靈の道に精進せんかな。

之を以て昭和九年終刊の辭に代へる次第である。

全村民各位に懇願

△一、米を一年の日數でわるとたゞ一はしの御飯に過ぎないのであります。△其二、升を會費にいたさざるに面事業につかふのが本會の目的であります。△其三、規則と役員名簿と御離状とを支部長(區長)さんから皆様にあげていただく様にいたしました。△其内に役員の方々に心からおん願ひ申し上げます。

昭和九年十二月 日 内郷村方面事業助成會

方面委員會 其取扱事項

十一月二十六日午後一時より役場内に例會を開催。方面委員全部及金澤助役吉田書記出席。全村小學校給食兒童、乳幼児收護方法、會費徵集方針、凶作地救護義捐金等に就きて協議した。其取扱事項左の如し。

昭和九年十月分

- 一、生活扶助、法令によるもの
- 二、保健救療、四、兒童保護、法令によらぬ者四八
- 三、相談指導、三七、戶籍整理
- 四、職業紹介、二七、教化
- 五、其他三、計一六三。
- 六、第一種世帯數五五、人口一〇七
- 七、第二種世帯數一〇七
- 八、人口五三三。第一種より第二種へ世帯數一、人口二。
- 九、第二種より第一種へ世帯數一、人口三。死亡一。以上

内郷村選舉有權者
衆議院議員選舉有權者五〇
五三。村會議員選舉有權者四七四五。

阪谷男爵書簡

(記者宛)
拜啓十八日付尊翰奉讀。藤原藤房卿御慰靈祭の状況掲載の内郷村報二十部御送付被下難有奉存候。前川君より承り候得ば先般來同卿墳墓の儀に付、種々御厚配に預り候趣厚く御禮申上候。勿々頓首
昭和九年十一月十九日 芳郎

黒井海軍大將書簡

(記者宛)
拜啓昨々御清祥奉賀候。陳は此度御送り被下候内郷村報五十號符別附録にて、南朝の大忠臣藤原藤房卿の墳墓發見の顛末ならびに慰靈祭の詳細を拜讀して、感慨無量なるを同時に、歴史の智識に一大光明を興へられし事を深謝し、特に一書を呈し候。尙時下切に禱御愛重候。勿々頓首
九年十一月二十日 黒井悌次郎

荒井茨城縣囑託書簡

(記者宛)
貴輪拜讀 御丁寧なる御挨拶痛入候。御送致の内郷村報正に拜讀。藤原卿御慰靈祭當日の模様を回想致し、深く感慨に耽り候。此段厚く御禮申上候。野生事先月二十一日上京阪谷邸へ御何致し其際御激動の御言葉を賜り感佩に不堪。爾來引續き調査聊か新なる手掛を得次第に御座候。是非々々國家の指定迄漕ぎ付けんと奮勵奉願候。先は御挨拶迄。尚濱崎副所長殿へ貴下よりよろしく御禮申上候。十一月十九日夕 荒井庸夫

最後に野戰軍砲兵第一聯隊の諸官並に演習中の宿舎御家族に最高の敬意を表して擲筆する。

本報を發行一ケ年以來、村報の発展に大いに寄与せられたることに感謝し、且其發展向上を期す。

本報發行所 内郷村報 社
編輯部 内郷村報 社
印刷部 平活版 所

學校増築美談

村會議員 草野三千雄

今度の學校の増築事業は、村として相當大きな仕事であつたが、此事業の裏面には、いろ／＼な美しい行爲が織りこまれて居る。明るい内郷村の爲に、誠に喜ばしい事である。

三つの學校の中で、工事の最も大きいのは内町校であつたが、毎日五六十人の人夫が働いて居り、中には小さい子供に乳飲子を負はして、せつせと働く女労働者も少なくなかつた。其處へ時々監督に來る委員が、其邊に遊んで居る、是等小さな子守子供に、一錢二錢と小使を、くれて行かると、親達は非常に感謝して居つた。その人は誰であらう方面委員の田中宇一郎氏であつたのである。

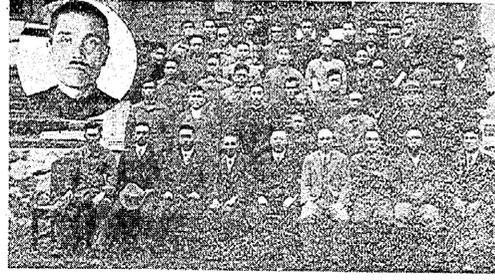
その時、消防檢閲について下見に來られた、組頭佐藤三平氏は、青年團員の此舉を見て、頗る感激し、金一封を贈られ、職員また茶菓を供して、其勞を稿つた。美しき人や生まれん美しき人の力になりしまなびや (凡平生)

内町校の工費は、豫想外に多額であつたため、校庭の砂敷は、今度の豫算では出來ないと聞いたので、職員と児童等は、それでは自分等の力で、之をやらうと何れも涙ぐましく活動でどう／＼舊校庭の砂敷を仕

計人員 二二六三名
計金百參拾四圓五拾五錢
齋藤傳藏氏 多年内町として、令名高りし同氏は突然腦溢血を發し、千葉縣の寓居に逝去、行年六十九

製作機懸賞發表

先年技師前川孝一氏が發明して、採炭界に一新機軸を開きたる、エヤークツシヨンプーンス(採炭作業上發破の効果を大ならしむる爲



前記式典内員授賞金賞列前

一等金百圓 秋山嘉藤
二等金三十圓 鈴木芳光
三等金拾圓 濱田末次
佳作金五圓 富田誠
辻次夫 齋藤初吉

磐城炭礦青年會第六回定期總會は、十一月二十五日正午より、淺野翁記念館に開催した。出席者百七十三名の盛會であつた。其幹部役員の氏名は左の通りである

同 九社 宅上田 直人
入營日隊名不詳 八木 新吉
同 根本 馨
寶寺住職、宮下秀貫兩師は

- 會長 上原四郎
副會長 田中義枝
幹事 田中宇一郎
同 山崎辰亥
同 猪狩喜平治
同 武藤義造
同 井上惠助
同 高野金作
書記兼會計 宗形將男
同 峯根支部長 森下寅市
同 副支部長 佐藤榮二郎
同 幹事長 井上惠助
同 副支部長 半澤貞輔
同 副支部長 小貫清操
同 幹事長 鈴木清
同 同 佐藤豊
△高坂支部長 圓谷兼廣
同 副支部長 初田七五郎
同 同 大高繁治
同 同 田中富五郎
同 同 本田辰雄
同 同 松本信市
同 同 伊藤松市
同 同 鈴木豊治
同 同 鈴木豊治
同 同 鈴木豊治
同 同 鈴木豊治

教育制度改革概論

矢野 恒太 大内民惠 著

昭和九年度内郷村入營者
同 九社 宅上田 直人
入營日隊名不詳 八木 新吉
同 根本 馨
寶寺住職、宮下秀貫兩師は

各壇家より一月金五錢つゝの、喜捨を仰ぎ、凶作地へ義捐金として送金した。

日本評論社 東京橋本三丁目

昭和九年度内郷村入營者

(總數六十名 村側四八名、營側一二名)

△昭和九年十二月一日入營	獨步六峯	根 矢内	源吉	騎 二小	島 志賀	一男	政雄
同	廣 畑	鈴木	貞雄	同 三御	坂 若松	一郎	信一
同	同 〇峯	根 沼田	秀雄	同 二御	高 箱崎	信一	信一
同	同 二四	浪花礦	實 實	同 七御	池 野	武雄	武雄
同	同 六堀	坂 江尻	喜七	同 七御	橋 池野	武雄	武雄
△同年十一月十一日入營	同 七四	秋山	永久保良平	同 七御	喜 多見	寅雄	寅雄
同	同 一九	宮 澤	佐藤 春雄	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
同	同 七三	平太郎	安藤 榮助	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
同	同 七三	白 水	宗形 辰夫	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
△同年十一月一日入營	同 七五	濱井場	笹原 敏雄	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
同	同 一九	宮 澤	武藤 二郎	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
同	同 一九	峯 根	塩田 正喜	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
同	同 一九	町 田	植木 國治	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
△昭和十年一月十日入營	同 一九	宮 澤	平間萬次郎	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
同	同 一九	海兵衛	宮 澤	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
同	同 一九	同 御	齋藤 政一	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
同	同 一九	同 御	椎根 勇作	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
△同年十月二十日入營	同 一九	濱松高射	社宅 小林 恒男	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
同	同 一九	同 社宅	德重 俊樹	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
同	同 一九	同 社宅	仲 平	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
同	同 一九	同 社宅	鈴木 四光	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
同	同 一九	同 社宅	加勢川角太郎	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
同	同 一九	同 社宅	瀧 山田 富一	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
同	同 一九	同 社宅	入山 草野 子雄	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
同	同 一九	同 社宅	平太郎 佐藤 兄二	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
同	同 一九	同 社宅	安藤 健治	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御
同	同 一九	同 社宅	渡邊 健治	同 二御	同 二御	同 二御	同 二御

教育制度改革概論

矢野 恒太 大内民惠著
 服部之吉
 (四六版二二頁 定價五十錢 郵税六錢)

行き詰れる現代の教育制度を解體して、學理と實際と、歴史と實驗とから新に大内案九主義を提唱す。天下知名の士の賛同校舉に違あらず。されど未だ一人の抗議者も現れず。

職員と児童等は、それでは自分等の力で、之をやらうと何れも涙ぐまじき活動でとうとう舊校庭の砂敷を仕

員金額は左の通りである。
 △第三方面 二〇七名
 金拾參圓五拾錢
 △町田方面 四三名

たるもの(の)の需用益々多きを加へたるを以て、警城炭礦に於ては、其製作機製作案を、懸賞募集したるに、

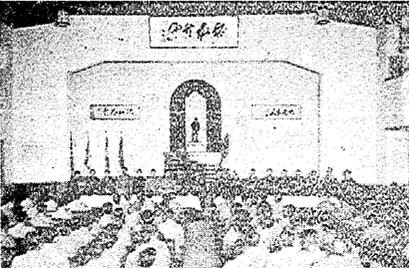
催した。出席者百七十三名の盛會であつた。其幹部役員の氏名は左の通りである

名譽 長 濱崎善三郎

同 九社宅 上田 直人
 入營日除名不詳 八木 新吉
 同 根本 馨
 備考、。印は幹部候補志願

磐炭入營送別會

十一月二十五日午後二時より淺野翁記念館に於て、磐炭分會同青年會主催の磐炭關係者の入營送別會を開催高野理事司會の下に、前川副長莊重嚴肅に開會の辭を



會別送者營入炭磐

述べ、上原會長は主催者を代表して、非常時軍縮問題を簡明に解説して、送別の挨拶をなし、次いで會員代表六名も立ちて其行を送り茶菓の中に各々歡をつくし長堀副長の音頭にて、全員萬歳の三唱し、田中青年副會長の閉會の辭あつて散會した。因に入營者一同に對して、金貳圓及菓子一折を贈呈した。(高野生)

我國教育學界の權威
 前京大總長小西重直博士
 書を寄せて曰く、多年ノ御體験下實地ノ御試練ニ基キ眞學實國ノ大精神ヲ拜味仕リ不思感激ニ打テ申候云々。

發行所 日本評論社
 東京橋本三丁目
 取次所 内郷村報社

二仕職の篤志
 清光院住職、福羽堅三 端
 寶寺住職、宮下秀貫兩師は

答

北海道十勝實習場 二年生總代 大内 一郎

光陰は正に矢の如く、懐しの實習場に於ける二足霜も何時しか過ぎ、本日こそ、將來樂しむべき日を招來するも、なるのではなかつたかと思はる、のであります。其間學長殿を始め、先生方の心からなる御訓育は、實に筆舌によく盡さざる所でありませぬ。只我等には其御教訓を守り、場の綱領を體し、大に奮勵努力、御高恩の萬分の一にも報いあるのみであります。又一面には、長官閣下を始め、拓殖部長殿、課長殿等に關係者諸賢の御鴻恩に報い、更に北海道民各位に報ゆる所あるを期するのであります。

非常時我日本の姿は、我等若輩の徒の、到底能く述ぶる所ではありませぬが、只農村の一角に於て、多々改善すべき点を見出すのであります。

土地の開拓のみならず、總べての方面の開拓をし創造をし、上に一天萬乘の大君を戴き、新農民、新農家、新農村の建設こそ、眞に建國の精神を體し、時代に醒めた我等開拓者の使命であると思ふのであります。

卒業後大部分は十勝管内に居住すること存じます。更にかはらざる御指導御鞭撻下さらん事を懐しの實習場の發展を、學長殿始め、諸先生、又新たに研究生とならる、方々の、御健康をお祈りいたす次第であります。

最後に拙詠を
 覺悟して我等行くなり戰の
 にはに立ちたる武士のごま
 (昭和九年十一月二十五日)

杉田版

杉田地蔵尊建立
後援會特輯
編輯者 内郷 高野金作
杉田 桑原兵次



このお姿の様な地藏尊を建立したいと思ふのであります
これは日立鐵山の供養塔であります (工費約六百圓)

地藏尊建立の發願

大 内 民 惠

先年私が、氏神稻荷神社に、皇大神宮以下全國の官國幣二百余社の祭神を合祀して、國本神社を創建し、其敷地を運動場として開放する事を申出るや、我杉田全村民各位は、之を諒とせられ、三ヶ年の農閑期を費して、其土工を完了し、忠魂碑を建立し、樹木を寄進して、今や稻荷山公園と稱する、近郷の一名所とせられたのであります。私は其尊き公共奉仕の精神に對して、常に感佩措く能はず、衷心より滿腔の敬意を表して居るものであります。而して私は當時、もご其敷地内に在つた、鹿又鈴木加

藤三家及我大内家の墳墓を共同墓地に改葬するに當つて、心中秘かに其跡の冒瀆せらるゝを恐れ、大内家の内佛地藏尊を建立し、其亡靈は勿論、我を生み我を育くんでくれた杉田村を開闢の昔から今日あらしめた、幾千百人の方々や、全國に普き我恩人知己、并に我一族中の先亡者の精霊をも供養し、其鴻恩を感謝すると共に、博愛衆に及ぼしるの聖旨にも一致する其本願を體して、南無天法人則の信仰に生き、將來子々孫々迄も、其生活を承継させる様にしたいものであるといふ希望を起したのであります。

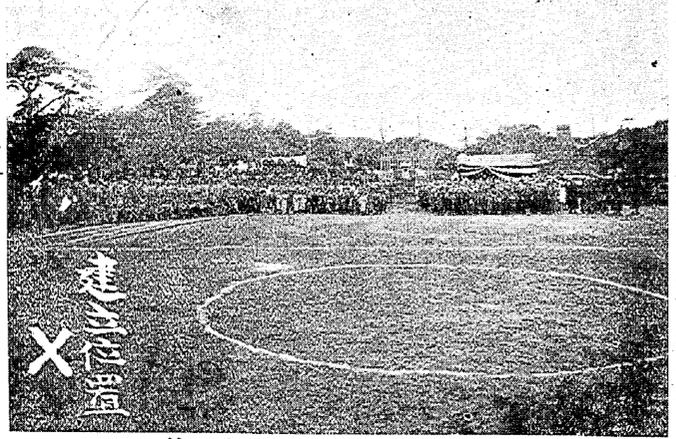
したが、種々の都合上、遷延今日に到つたのであります。然るに最近愈々其を實現しやうとしました處、身邊の各位が、言下に其趣旨に共鳴賛同し、且つかゝる事業は、一般多衆の翼賛をも仰ぐべき所以を説かれ、終に原村長を會長とする後援會を組織し、關係ある村内外の有力家を賛助員に推薦し、全村總動員を以て之を聲援して下さる事になつたのであります。

哲人は郷里に容れられずとか申しますが、平凡に生れた仕合せ者なる私は、此厚誼純情の溢るゝ御協賛に當面して、唯々感激の涙あるのみであります。此機にのぞんで將た何をか言はんやであります。一切萬事を各位の御計らひにお任せして、其完成を希ひ、私の念願と信仰とが、ひとり我郷關のみならず、廣く天下に普及せん事を、懇望するに過ぎないのであります。あなかしこ、南無天法人則。

附記
後援會趣旨を拜讀するに私を讚嘆せられたる條は、更にあたらず、汗顔の至りに堪へざれども、各位の御高情を無にする事を慮り、一字の改訂も加へず、勇を鼓して其儘いたく事にいたしました。

地蔵尊建立後援會趣意書

- 此度吾々の最も畏敬し欣慕する大内先生が、別項本願の如く先年村に開放せられた稻荷山公園の舊墳墓地跡に、地藏尊建立を發願せられた事は、眞に一大美舉と謂ふべきであります。
- 先生は夙に聖慮を體して國體觀念の強調と、教育制度の刷新に總ゆる研鑽を積まれ、其多年の蘊蓄と天稟の達眼とを遺憾なく發揮して江湖の識者に呼びかけつゝある堂々たる名論卓説は、正に雞群一鶴の感躍如たるものがあります。
- 而かも先生は綽々たる餘裕を以て、福島縣方面委員聯



に數ふるに違あらず、縣下徳望家の第一人者である事は、茲に贅言を要しない處であります。宜なる哉本年 (以下二面へつづく)

杉田地蔵尊建立位置
中田小學校運動會記念撮影 (杉田神社右は杉田忠魂碑)

(第一面よりつづく)
紀元節の佳辰に當り、社會事業功勞者として表彰の榮譽を荷はれたる、蓋し故なきにあらざるであります。而して先生には曩に我國空前

地藏菩薩

地藏菩薩は梵名をクシチカルハミといひ會て佛の附屬を受けてその入滅したまひてより彌勒菩薩出生までの中間時代に五濁(劫濁見濁煩惱衆生濁命濁)の世に在りて六道の衆生を教化し救済に力め給ふ尊なりとして尊崇せらるる菩薩である故に吾人あつて此尊の御名を稱へ禮拜供養するならば無量無邊の功徳を興へ給ふといふのである而して胎藏界曼荼羅にては地藏院の主尊であり金剛界にては南方寶生佛の四親近の一なる金剛幢菩薩として顯現してあらる

(昭和新聞譯大藏經)

地藏菩薩の地蔵は、地の蔵でありまして、地は萬物を育成し、同時に地中にはいつたものは、如何なるものをも淨化し、且つ收蔵して餘す處なきが如く、常に六道を往來して、しかも民衆的に、善人は勿論極惡無道の人間をも、教化救濟し給ふ方であつて、其本願は、博愛衆生及ボシの聖言とも一致するものと拜察せらるるのであります。されば私共が其信仰を得れば心身共に淨化せられ、あらゆる幸福なうくる事は當然の事と思はるゝのであります。(民恵附記)

の國本神社を創建齋祀せられ、今又更に前掲の趣意に基き全國無比なる地蔵尊の建立を發願せられました事は、唯々感激讚嘆の外なく吾々は此の聖舉に欣然賛同

し之が後援會を組織し、舉村一體となつて此事業の完成を期し、一つには在天の靈を供養し、一つには純眞なる信仰の下に醇風良俗の美風を全村に衍め、先生の理想とせらるる「平和なる

地藏尊建立寄進拜領規程

- 一、寄進金額は一人一口金貳拾錢とす。但し幾口にても之を拜領す。
二、寄進拜領の切期限を昭和十年一月三十一日とす。完成後に於て、寄進者芳名録を編纂、小冊子として寄進者各位全體に贈呈す。
三、其寄進芳名録一部を、地藏尊臺石中に納めて、永久に寄進者各位の供養をなすものとす。
四、建立費及開眼式舉行費豫算は、既に寄進濟金額貳百七拾貳圓を最小限度とし、今後拜領したる金額を加へて、其に相當する尊像を建立する方針なり。石工 東京 小松龜次郎 杉田 大友政壽
六、地藏尊建立落成開眼式は、昭和十年三月二十四日を以て舉行す。
七、村内并に近傍よりの寄進金は、最寄の委員理事若しくは贊助員に納入せられたく、遠隔地の寄進金は、其地方の贊助員若しくは、振替口座或は郵便爲替を以て、直接本會に納入せられたし本會に關する報告一切は、其都度内郷村報杉田版紙上に掲載すべし。
八、昭和九年十二月十五日

杉田地蔵尊建立後援會

(振替口座座仙聖九六一四番)

役員名簿

- 村内之部
會長 杉田村長 原徳左工門
副會長 同 助 市川 清治
理事 兼會計郵便局長 山林堂博信
同 兼理事 同 村議 高根 兵作
同 同 鈴木 武七
△理事 事 (以下順序不同)

御協賛あらん事を。
集ふべし冬の御佛祭るべし
長沼町 磐瀬鐵鐙

- △委員
山本堂博信 石川 庄次 國分 孫市
渡邊 之介 安田 兵衛 鈴木 長吉
鈴木 長吉 佐藤 兵衛 鈴木 長吉
高根 兵作 佐藤 兵衛 鈴木 長吉
△贊助員
光恩寺 報徳寺 善應寺
佐久間清一 高橋 直記 遠藤 貞吉
渡邊卯平治 渡邊喜太郎 大津 英雄
安田 儀作

村外之部贊助員

- 二本松町、善性寺 眞行寺 顯法寺
七島徳太郎 野地菊司 市川由廣
國分三之介 岡村榮八郎 齊藤まつ子
本宮町、石雲寺 渡邊眞藏
渡邊雄治 嶽下村、善性寺 七宮
三太郎 大山村、菊地寅吉 來迎寺
玉井村、原瀬勝衛 小濱町、今泉哲太 松本龜吉 松本松三
新殿村、村田友治 石井村、岩角寺
高川村、安田宇一 遊佐誠司
福島市、内池久五郎 大原一 武藤萬敬 安田うめ子 照沼哲之介
郡山市、保森覺圓 河野大徹 大方倫助 松山政治 渡邊惣吉 安部井操 桑原七郎 大津順藏
須賀川町、太田貞喜 長沼町、磐瀬次郎 白河町、小山久吉 桑折町、佐藤泰然 飯坂町、鈴木勝永 小野新町、服部義顯 東白川郡常豊村、三ツ木 瀨上町、内池與

寄進拜領分

- 五百口(壹百圓) 大内 民恵
五十口(拾圓) (寄進順)
大内 泰治 濱崎 弘喜 安田 やた
田中 利八 渡邊 惣吉 村田 友治
岡村榮八郎 磐瀬 次郎 内池久五郎
大野 運吉 七島徳太郎 渡邊 眞藏
渡邊 雄治 濱崎 善三郎 丹羽 修輔
二十五口(五圓) 卷崎 みつ
七十五口(拾五圓) 杉田佛敎婦人會
五十口(壹圓) 玉木定治 物見清
計 壹千叁百拾口
金貳百七拾貳圓也